

産みの人称性と性的差異 :「誕生肯定」再論としての「産む男」試論

「産み」の哲学に向けて(3)

居永正宏*

はじめに

生の端緒である産みは生の終端である死とは異なった人称性を内蔵している。そこでは、独在的な〈私〉や同質的な諸個人ではなく、性的差異によって分かれる男と女、そこから現れる子どもという、異質な三者の関係が本質をなしている。そのような産みの構造を踏まえ、本論文では、筆者が継続して行っている産みをめぐる哲学的考察の一つの覚え書きとして、男と産みの関係について一つの可能性を提示したい。

1 死の人称性と誕生の人称性

産みの人称性に入る前に、まずジャンケレヴィッチによる死の人称性の区別を確認しておきたい。死は産みと並ぶ人間の条件だが、両者を対比してみると、それぞれにおいて考えられる人称性は異なっており、死と産みが生の両端を単に対称的に区切っているわけではないことが明らかになる。

ジャンケレヴィッチが『死』において一人称の死、二人称の死、三人称の死という区別を行ったことはよく知られている。三人称の死とは、私にとって第三者的な位置にある一般的な人の死のことであり、普通の意味での「他人の死」である。それは確かに悲しむべき出来事かもしれないが、結局は毎日限りない数の人々が死んでいくという統計的な数字に吸収されていくような死である。次に、二人称の死とは、私と密接な関係にあるかけがえのないあなたが死ぬことであり、具体的には家族や友人、恋人などの死をイメージすればよいだろう。それは統計的な数字には還元されない死であり、私たちにリアルな体験として迫ってくる死である。しかし他方でそれはあくまでも世界内での体験であって、同じく世界内の出来事である三人称の死と地続きであり、両者のあいだのどこかに明確な境界線が引けるわけではない。つまり、三人称の死と二人称の死は「私(一人称)ではないものの死」という点で共通している。

* 日本学術振興会特別研究員(～2016年3月)、大阪府立大学博士研究員(2016年4月～)。

それに対して、この二つの死とは絶対的に断絶しているのが、私の死、即ち一人称の死である。もちろんすべての死がその当人にとっては一人称の死なのだが、ジャンケレヴィッチが一人称の死という言葉に込めているのは、そのような「一般化した一人称の死」ではなく、「いまこの文章を読んでいるこの私の死」である。それは例えば、「虚無は今晚始まる。そして、いつまでも続くことだろう。人は一度しか死なない。しかも永遠に終わりだ。永遠にという三つの文字の意味することをあなたは理解しているのだろうか」¹、という読者に語りかけるような表現から読み取ることができる。

この死の人称性の区別を踏まえて、死の反対側にあつて、私たちの生の端緒をなしている産みについても、人称性という枠組みを通して認識を深めることができるように思われる。ただそれは、死の人称性をそのままひっくり返すことによってではなく、人称性を産みという営みに即して改めて考察することによってである。これは極めて重要な点である。産みの人称性は死の人称性を単に反転させたものではない。「死の人称性を反転」させて得られるのは、産みではなく、ある種の抽象的な「誕生」の人称性である。産みの人称性と区別するために、この「誕生」の人称性についても見ておこう。

この「誕生」とは、「どこからともなくまた理由も原因もなくこの世界にあるとき出現した」というようなイメージで語られる、独在的な私のこの世界への出現である。例えばハイデガーの「被投性」概念もそれに重なる。一人称の死が他者とは切り離された単独者としての私の消滅であったように、一人称の誕生は、いかなる他者とも関わりを持たない私単独の無からの出現である。同じく、二人称の誕生は、あなたがどこからともなく出現すること、もしくは現に私に二人称として立ち現れているあなたが過去にどこかで誰の助けも借りずなぜかこの世界に出現したという端的な事実のことである。そして三人称の誕生は、一般的で統計的な数字となる誕生である。このような誕生の人称性は、生の端緒とは生の終端である死がそのまま時間の流れを挟んで反転したものだという前提に基づいている。

しかし、このような誕生の人称性は生の端緒を正しく捉えていない。なぜなら、私たちが単に存在するのではなく生きているものであるかぎり、その生は生によって産み出されるのであり、生によってしか産み出されないということ、したがって生の始まりは単なる一人称的な無からの出現ではありえないという事実を、それは無視しているからである。生の始まりは、ある生から別の生が出現すること、即ち「産み」なのであり、不条理な虚無への転落としての死を反転させた、無からの根拠なき湧出などではない。生の始まりと終わりは非対

¹ ジャンケレヴィッチ 1978、348 頁、傍点原文。

称なのであり、産みは死の応用問題としてではなく、それ自体として第一に探求されなければならない。

2 産みにおける人称の複数性

死が究極的には瞬間的な断絶として想定されるのに対して、産みは時間的な幅を持つ生の営みである。受精や分娩といった区切りとなる契機はあるが、決定的な「産みの瞬間」は存在せず、性行為から妊娠、出産、子育てに渡る期間、また特に女性の身体にとっては排卵や月経という形で人生のかなりの部分に及ぶような、生の活動のまとまりが産みである。したがって、産みの人称性を考えるとといっても、そのような多様な活動のどこに焦点を当てるかによって人称性が変化するかもしれない。だがここでは、ひとまず基礎的な作業として、「男女のパートナー関係から新しい人間が産まれる」という産みの全体的な構造を対象とする。

さて、産みを「男女のパートナー関係から新しい人間が産まれる」という大枠で捉えた場合に立ち現れる人称性とはどういうものだろうか。それは、端的に言って人称の複数性である。死の人称性は、一人称、二人称、三人称と分けられたが、それらはすべて正確には一人称単数、二人称単数、三人称単数である。なぜなら、死とは死ぬ本人に固有の可能性である以上、死の人称とは単数形でしかありえないからである。一方で産みは、そのような単独者の生に内在した固有の可能性のようなものではない。産みは一人で始めて一人で終わることができるようなものではなく、始めるには二人必要であり、終わりにはさらに増えて三人（以上）になるという独特の営みである。言い換えれば、産みは人称の複数性を前提とするだけではなく、人称の複数性を作り出す唯一の営みであるという意味で、優れて複数的な人称性を有しているのである。この人称の複数性を三人称から順に確認しておこう。

まず三人称複数の産みがある。それは私とは直接関係のない、誰かと誰かによるある子どもの産みである。この産みは、三人称単数の死と数は異なるものの、統計的な数字へと回収されていくという点で共通している。

死と産みが大きく異なるのは、一人称、二人称の領域においてである。二人称は、産みにおいては単に私にとって掛け替えのないあなたというだけではない。あなたは私が共に産みを営むパートナーであり、私はあなたと共に産む。そして私が「あなた（二人称単数）」と出会ったあと、その二人は共に産みを営むものとして「私たち（一人称複数）」となる。その私たちが、子どもという「あなた」を産む。そしてまた私たちとその子どもは三人で「私たち」となる。この

二人称単数と一人称複数¹の往復運動は、死にはない産みの人称性の核心である。つまり、死においては一人称と二人称が断絶していたのに対して、産みにおいては複数性という契機によって両者が地続きになっているのである。さらに、「私たち（一人称複数）」が「あなた（二人称単数）」を産むということの裏面として、「子どもとしての私（一人称単数）」は「あなたたち（二人称複数）」から産まれる。産みとは生から生が産まれることであるから、産むものと産まれるものとの人称はこのように表裏一体となって成立する。

このような産みにおける人称の複数性の特徴とはなんだろうか。再び死と対比させて考えてみる。死の人称は基本的に単数形でしかありえないが、ジャンケレヴィッチは死を通した一人称複数について、次のように述べている。

第一人称複数という矛盾する観念は、“わたしが”が定義そのものから常に単数形であるというのが真実であり、かつ複数²は必然的に他者に適用されるものなら、一種の怪物だ。《われわれ》によって表明される兄弟関係は類推による帰納の結論として得られるのではなく、内奥の経験において、交感により、また直観で生きられる。²

「第一人称複数」が「矛盾する観念」だということは、死の人称性から必然的に導かれる。なぜなら死は誰にも代わってもらえない可能性であり、私の死をあなたが経験することは絶対できず、その反対もありえないからである。しかし、なぜか私はあなたが死ぬということを単にあなたの身体の崩壊としてだけではなく、そこにいる何か絶対的な存在の消滅として、あたかもそこにいる私が死ぬかのように「内奥の経験において」理解することができる（かもしれない）。これが、ジャンケレヴィッチが死を通して記述する一人称複数である。仮に、この死に直面した単独者の複数性という矛盾した事態が可能だとして、それを同質的（homogeneous）な複数性と呼ぶことができるだろう。この一人称複数に含まれるあなたと私は、死を前にして等しく単独者だからである。

それに対して、産みにおける複数性は、異質的（heterogeneous）な複数性である。なぜなら、私とパートナーは共に産みを営む「私たち」ではあるが、この二人は産みを前にして同質的な存在ではなく、平等でもないからである。その根本的な理由は、単に私とあなたが違う人間だからではなく、男と女として違う身体によって産みに関わっているからである。さらに、そこから産まれてくる子どもは、先に述べたように「あなた」であると同時に「私たち」となる存在だが、そのあなた＝子どもにとっての産みは、その子どもを産んだ私たちに

² Ibid., 27 頁。

とっての産みとは決定的に異なる。つまり親と子は同じ産みに関わるのだが、両者の産みへの関わり方は同質的でも平等でもない。

そこで、この産みにおける異質的な複数性の内実が問題になる。つまり、生殖における性的差異とは何か、そして産みを介した親子の関係とは何か、という問いである。

3 O'Brien の生殖論における性的差異

そこで、性的差異について、カナダのフェミニスト Mary O'Brien の議論を参照したいのだが、その前に産みと性的差異について一般的な注意を促しておきたい。

(男性) 哲学者が産みを論じようとするときに陥りやすい傾向がいくつかあるように思われる。一つが、前々節で示したように、産みを抽象的な「誕生」、「無からの単独者の出現」として捉えることである。二つ目は、産みを、新しい人間を産むことではなく、芸術や思想における創造、または道具や建築物の制作などとして捉え、それらの「優れて人間的」な産みに対して生殖を動物的なものとして下位に位置づけることである。プラトンの『饗宴』にあるディオティマの議論や、(これは女性だが) アーレントの『人間の条件』などがこれに当たる。三つ目は、子どもの産みを対象としながらも、男女の身体性の違いや性行為から分娩に至る過程などには目を向けず、すでに産まれた子どもと親の関係を一般的に規定することである³。これらの三つの傾向は、共通して、最も生々しい肉体の次元で産みに関わっている女性の身体を理論から排除し、あたかも産みにおいて男女の性的差異が問題にならないかのように装うことで、そこに内在する人称の異質的な複数性を正しく捉えられていないように思われる。産みの人称の異質的な複数性をまず生殖における性的差異として問うという本論文の問題設定は、これらの傾向から脱して、生殖過程における女と男と産みの関係を正面に見据えている。

しかし、生殖における性的差異を論じると言っても、それは単に生物学的な雌雄の差異を確認する以上に何ができるのだろうか。「男は射精し、女は受精卵を育てて出産する。産みの性的差異とはそれ以上でも以下でもない」、と言って終わりではないのか。そうではない。それが人間の営みである以上、「単なる生物学的な事実」というものはない。死が身体の単なる生物学的な崩壊に尽きるのであれば、死の哲学はありえないだろう。そうではないからこそ、死につい

³ 例えば次のようなもの。「つまり、彼らのうちの誰も生まれてきた子どもを決して自分の子供とは見なさず、全員が全員を親族と見なす。つまり、しかるべき年齢に生まれたのであれば、誰をも兄弟姉妹とみなし、自分より先に生まれた人、年上の人を父母や祖父母、年齢が下の人を子どもや孫と見なすという工夫をしてもらうことにしたのだ」(プラトン 2015、15 頁)。

での様々な思想的試みが行われてきたのであり、産みについても——いわゆる「本質主義」に陥らないかたちで——同じような試みが可能なはずである。

その一つの試みとして位置づけられるのが、イギリス出身のカナダのフェミニスト思想家であり、元看護師で助産師経験もあるという Mary O'Brien の *The Politics of Reproduction* (1981) である。特に日本ではあまり言及されず、いささか古い文献ではあるが、産みと性的差異を正面から主題化した功績はもっと評価されてよいと筆者には思われる。O'Brien は同書で産み (reproduction, birth) を主題とした哲学が必要だと主張し、マルクスやボーボワールの理論、またギリシャ悲劇に表れる家父長制に対する批判的検討などを行っている。その批判の要点は、女が主役である産みの領域の実践的かつ理論的重要性が正しく認識されていない、ということであり、それに対して O'Brien 自身が提示するオルタナティブは、いささか抽象的でエコフェミを髣髴とさせる、産みを通した自然と人間との和解である。その議論の中にある、O'Brien による産みと性的差異の捉え方は次のようにまとめられる。

1. 人は継続性 (continuity) を求める
2. 親にとって子どもは継続性を満たしてくれる存在である
3. 男は性交において精子を体外に放出することによって産み (reproduction) から疎外され継続性を失う
4. 女は妊娠が意図とは関係なく自然的に進行することで産みから疎外されそうになるが、自らの出産 (labor) によってその疎外を回復し、子どもとの継続性を得る
5. 男は女が出産した後に子どもと産んだ女を占有 (appropriate) することで、擬似的な継続性を構築する。それが家父長制の起源である。

O'Brien は、人 (man) が生産 (production) において労働の成果が自分から切り離されてしまうときにその労働から疎外されるように、男 (man) は産み (reproduction) において自らの精子から切り離されてしまわざるをえないので、男は産みから必然的に疎外されるという。その疎外を回復するために、男は他の男と共に、産む女と産まれた子どもの共同管理体制としての家父長的政体を作るのである。このような基本的分析に基づいて、O'Brien は、女の生殖意識 (reproductive consciousness) は継続的で統合的なのに対して、男のそれは断片的で断続的だと主張する⁴。

ここで同書全体の理論的枠組みや歴史理解を検討することはできないが、この O'Brien の主張を読んでまず思うのは、それが産みを性的に非対称なものとして

⁴ O'Brien (1981) p.59.

正面から捉え、それを人間の意識の次元において問おうとしたことに意義がある一方で、それがマルクスに深く影響された O'Brien 自身の疎外論にあまりに素朴に接合されているのではないか、ということである。確かに、男が射精によって疎外され、産まれた子どもと産んだ女の占有（家父長制）によってそれを回復するというのが、産みにおける男の基本的なあり方だという O'Brien の主張は一定の妥当性があるように思われる。しかしまず、労働疎外論においては労働が社会的な行為である以上、それを変革して疎外されない労働が可能であるのに対して、この射精疎外論においては、射精は生物学的な機構であるから、疎外されない射精は理論的にありえないことになる。さらに、射精が必然的に疎外に繋がるとしても、それを回復する方法が必ずしも家父長制でなければならないわけではないから、そうではない具体的なかたちを提示できればいいのだが、O'Brien はそれを示していない⁵。筆者には、O'Brien の分析はその批判的な側面では正しいものの、それを越えた男と産みの関係の可能性に関しては十分突き詰められていないように思われる。射精は必然的に疎外に繋がるわけではないし、また女と子どもの占有ではないかたちで男が産みを通して女と子どもとの継続性——本論文のいう異質的な複数性——を実現する道はあるのではないか。次にその試論を提示したい。

4 「誕生肯定」再論としての「産む男」試論

産みにおける人称の異質的な複数性とは、女と男の異質性と、親と子どもの異質性である。O'Brien の言うように、生物学的機構である射精によって、男は産みの営みから必然的に排除されるとしよう。しかし、それは男と女の異質性の次元の話である。O'Brien によれば、それがそのまま男親と子どもの異質性の関係にも繋がり、疎外を回復するために男は女から子どもを取り戻して占有し、ひいては産んだ女も専有する。しかし、この後者の異質的な複数性、つまり男親と子どもの関係は、占有以外のかたちで成り立つことも可能なのではないだろうか。それが翻って、射精の新たな捉え方にもつながるのではないか。以下、いささか唐突な議論になるが、筆者が以前にも論じた森岡正博の「誕生肯定」概念⁶の再論を通して、産みと男の関係を考えてみたい。

筆者は以前、森岡の「誕生肯定」概念の批判的検討を行った論文において、「私が産み出した他者の誕生を肯定することを通じた自己の誕生肯定」が、自己の

⁵ 同書の最後の段落で、「…生産 (production) 過程に女性を同等なかたち (on equal terms) で統合することは自由のために必要であるが十分ではない。自由は、生殖 (reproduction) 過程に男を同等なかたちで統合することにもかかっているのだ」(ibid., p.210) と述べられるのだが、それ以上の議論は与えられない。

⁶ 森岡 (2007; 2011)。

誕生肯定の基本的なかたち」⁷ではないかと主張した。つまり、森岡が誕生肯定をひとり人間が自己の生の中だけで達成できると考えていたのに対して、筆者は自己の生から産み出された他者の生を肯定することを経由してこそ、そしてそれによってのみ自己の誕生肯定が可能ではないかと主張した。いま筆者は、それは産みと男の関係の可能性を示唆したものではなかったかと考えている。

つまり、男は射精によって疎外されるが、——子どもを占有することによってではなく——そこで産まれた子どもの誕生を肯定することで、自らが関わった産みという営みからの疎外を回復することができるのではないかと、ということである。たしかに、男は身体的には出産できない。その点では女性の身体だけが産むことができ、男は射精という契機によって一時的に疎外される。しかしそこで産まれた新しい人間の誕生を、「生まれてきてくれてよかった」と肯定することによって、男は産みの営みに回復し、その産みを優れて人間的な産みにするのではないだろうか。そして、「産む男」とはそのような肯定を行なう男のことではないだろうか。またそれは、実際に子どもが生まれる以前、つまり出産に先立つ性交の時点でも可能だと思われる。そうだとすれば、性交に対する態度として、それによって産まれてくるものを肯定することによって、男は射精という疎外から予め回復すること、即ち射精において疎外されないことが可能ではないだろうか。そのとき、射精は疎外の契機ではなく、誕生肯定の契機となる。

しかし、筆者は先に挙げた以前の論文では、「他者の誕生肯定を通じた自己の誕生肯定」を主張していた。それに従えば、子どもの誕生肯定は私自身の誕生肯定に至るプロセスの一段階、もっと言えば、手段に過ぎないように思われる。そこで、その主張をここで修正しておきたい。

その修正のためにまず確認しておきたいのが、「生きてきたことの肯定」と「生まれてきたことの肯定」の区別である。森岡は、前者を「人生まるごとの肯定」、後者を「誕生肯定」と呼んでいるが、ここでは前者を単に「人生肯定」と呼ぶことにする。この人生肯定と誕生肯定の区別について、森岡は「単独二段階説」をとっている（この名称は筆者による）。つまり、人はまず自分が生きてきた人生全体を肯定し（人生肯定）、その後で、それに基づいて自分が産まれてきたことを肯定する（誕生肯定）のである。そして森岡にとって、それは一人の人間が原理的には他人の生とは関係なく行なう孤独な試みである。それに対して、筆者の以前の論文は、いわば「単独他者経由三段階説」に立ち、第一段階として私による他者の誕生肯定があり、それが翻って第二段階である自己の人生肯定、そして第三段階である自己の誕生肯定につながると考えていた。ここでも、肯定の主体はいずれの段階においても私一人である。このように、人生肯定と

⁷ 居永（2012）、61頁。

誕生肯定を共に（筆者の場合は他者を經由するにせよ）同じ一人が行なうとすれば、次のような問題が生じる。

これを一般化すれば、私が「生まれてきて本当によかった」と思うことと、他人が「生まれてきて本当によかったと思うことが、どのようにつながっているのか」という問題になる。（森岡 2007, 474）」

（一つの問題は、）「人生まるごとの肯定」の段階にとどまるのではなく、「誕生肯定」の段階にまで至ることによって、いったい何か達成されるのかという問題である。「誕生肯定」には、「人生まるごとの肯定」によっては得られないどのようなメリットがあるのかということである。（森岡 2011, 205）

一つめは、世界中の人が誕生肯定できていなくても、私だけ誕生肯定することが原理的に可能であるが、それでいいのかという問題である。二つめは、人生肯定と誕生肯定の関係、そしてそもそも誕生肯定自体の意味の問題である。森岡はそれに対して、暫定的にはあるが、「私はなぜ生まれてきたのか」という問いに答えるためには人生肯定ではなく誕生肯定でなければならないから、というような回答を与えている。

さて、いま筆者には、このような問題が生じるのは、そもそも問題の立て方が間違っていたからではないかと思われる。即ち、人生肯定と誕生肯定の関係を、単独者による段階説によってではなく、「相互説」によって理解すれば、問題は霧散するように思われるのである。

相互説とは次のようなものである。人生肯定とは私が生きてきたことを私自身が肯定することなのに対して、誕生肯定は私が私自身に行なうことではなく、私から産まれたものに対して私とその誕生を肯定することだと考えるのである。そしてまた、他者は他者自身の人生肯定をするとともに、またその他者が産んだものの誕生肯定をする。そして私は決して私自身の誕生肯定を自分で行うことはできないし、他者は私に代わって私の人生肯定を行うことはできない。したがって、私の誕生肯定は、私を産んだものによって「生まれてきてくれてよかった」と肯定されることによってしか成り立たない。これを「私」の視点から口語的に言い換えれば、「私はあなたが生きてきてよかったかどうかはわからないが、あなたが生まれてきてくれてよかったと思う。そして私は自分が生まれてきてよかったかどうかはわからないが、生きてきよかったと思う」⁸、とい

⁸ この相互説は、フォークシンガーである竹原ピストルの「トム・ジョード」という曲の次の一節から発想を得た。「生まれてきてよかったとまでは思えないけど、生きてきてよかったとは思っているよ。だってあなたと出会えたから、とまでは思えないけど、あなたが生まれてくれて

うことだ。簡単な表にすれば下のようになる。

	私	他者
私の人生肯定	○	×
私の誕生肯定	×	○
他者の人生肯定	×	○
他者の誕生肯定	○	×

では、なぜ私は自分で自分の誕生肯定ができないのだろうか。それは、私は私自身の生の外側に出ることができないからであり、私が産まれたことは私の生の外側（との境界）にあるからだ。それは、私には私自身の弔い

ができないのと類比的である。私は私自身の死を死ぬのであり、それを他人に代わってもらうことはできない。しかしその死を弔うことは、他人にしかできない。同じように、私は親による私の産みを産まれてきたのだが、その産みを肯定することは私にはできない⁹。また逆に、なぜ私は自分の人生肯定はできるが、他人の人生肯定はできないのだろうか。それは、私の生を生きてきたのは私しかいないのだから、その全体を肯定できるのは私しかいないからだ。

この相互説において、私は、私が産まれてきたことを肯定されることを土台とすることによって私が生きてきたことを肯定することができ、また逆に私が生きてきたことを肯定することによって私は私から産まれてくるものを肯定することができる、というような構造が見えてくる。人生肯定と誕生肯定は、こうして私と他者との間で循環しながら、お互いがお互いの土台となっているのではないだろうか。

森岡は、「私はなぜ生まれてきたのか」という問いへの回答として自分による自分の「誕生肯定」を位置づける。しかし、私を産んだのは私ではないのだから、私が産まれたことを私自身が根拠付けることはできない。即ち、「私はなぜ生まれてきたのか」という問いは私自身には原理的に答えられないのだ。そうではなく、まずあるのは「あなたが産まれてきてくれてよかった」という誕生肯定なのであり、「私はなぜ生まれてきたのか」というのは一見哲学的疑問に見えながらも、実際は他者による私の誕生肯定の欠如を示す叫びなのではないだろうか。それに答えられるのは、他者による私の誕生肯定だけである。それに対して、私の生を生きるのは私自身しかいないのだから、私は自分の人生肯定の全責任を負う。「私はなぜ生きてきたのか」という問いは、私以外の誰にも答えられないし、それに対しては、「私は生きてきてよかった」という人生肯定を自分自身で掴むしかない。

唐突な議論から長い回り道となったが、このような人生肯定と誕生肯定の相互説から見れば、産みにおける人称の異質的な複数性とは、産みという契機を介して誕生肯定が成り立つ構造のことではないかと筆者には思われる。そして、

てよかったとは思っているよ」。竹原（2015）に収録。

⁹ 産みと弔いの連関については、居永（2015）参照。

男は一般的なパートナー関係やそこで営まれる生殖と子育てに真摯に関わるだけではなく、この誕生肯定の構造を成り立たしめることによってこそ、「産む男」になるのかも知れない。

おわりに

本論文は極めて実験的なものであり、論述の問題点は数えきれない。少し思いつくだけでも次のようなものがある。

1. 男と女と子どもという、異性愛核家族をモデルとするような記述
2. すべての女性が産むわけではなく、産めない女性も産まない女性もおり、また不妊の男性など身体的に産みに関われない男性もいるという事実への配慮不足
3. すべての人が必ず男／女の二元論のどちらかに属するわけではないし、そもそも男／女と区別する行為がその区別を生み出しており、それによってその二元論からはみ出す人々が抑圧されているという社会学的現実を無視
4. O'Brien による生殖過程と社会理論の素朴な接続（一種の生物学的決定論）への十分な批判的検討がない
5. 「誕生肯定」という抽象的なことばが実際に何を意味しており、それが具体的にどう行われるのか不明
6. 誕生肯定は男だけの特権ではなく、女にも同じように関わるはずだが、それが男と産みとの関わりという視点からしか論じられていない
7. 実際に肉体的に産んだ親子の間でしか誕生肯定できないとすればそれは狭すぎるし、もしそうではないとしたら逆に「産み」概念が広がりすぎるが、その両者をどう調停するか示していない

そしてこの他にも限りなく答えるべき、補うべき点がある。

これらの問題点に関しては、以前の論文に回答が含まれているものもあれば、産みの哲学を着想してから今に至るまで解決の目処が見つからないものもある。しかしともかく、本論文では、産みと死の人称性が対称的ではないこと、産みの人称性とは人稱の異質的な複数性であること、その異質的な複数性の中に相互的に働く人生肯定と誕生肯定の構造があること、産みにおける男のあり方の可能性をその構造をもとに考えることができるかもしれないこと、これらの点を主張できたことをとりあえずの成果として、本論文を閉じることにしたい。

参考資料

居永正宏 (2012) 「他者の産出と自己の誕生肯定」『現代生命哲学研究』第 1 号、46-68.

——— (2015) 「「産み」と「死」についての覚え書き：「弔い」を手掛かりに「産み」の哲学に向けて (2)」『現代生命哲学研究』第 4 号、28-38.

O'Brien, Mary, (1981) *The Politics of Reproduction*. Routledge & Kegan Paul.

ジャンケレヴィッチ・V、仲澤紀雄訳 (1978) 『死』みすず書房.

竹原ピストル (2015) 『youth』ビクターエンタテインメント.

プラトン、岸見一郎訳 (2015) 『ティマイオス／クリティアス』白澤社.

森岡正博 (2007) 「生命学とは何か」『現代文明学研究』第 8 号、447-486.

——— (2011) 「誕生肯定とは何か」『人間科学』6、173-212.

※本研究は JSPS 特別研究員奨励費 25-1743 の助成を受けたものである。